

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第 897 号 平成 27 年 3 月 16 日

## フリースクールと公的支援

文部科学省は、フリースクールに対する公的支援について、「フリースクール等に関する検討会議」を設置する等して、本格的な検討に着手しました。

フリースクールというのは、不登校の子ども達が学習指導を受けたり体験活動をしたりする民間の施設で、全国で約 400 施設あるとされています。また、運営主体は NPO 法人や保護者等で、規模も数人から数十人と多岐にわたっています。

ただ、このフリースクールは学校教育法上の学校ではありませんので、いわゆる私学助成の対象とはなっていませんし、フリースクールに通わせたとしても就学の義務を果たしているとはみなされていません。一方では、フリースクールで勉強した場合には、在籍する学校の校長の判断で出席扱いとされています。

このように、フリースクールは、学校とは位置付けられていないにもかかわらず、その教育機能は一定程度評価されるという矛盾した状況に置かれて来ましたが、安倍内閣は、早急にフリースクールに対する支援策を講じる事とし、2015 年度（平成 27 年度）末までに、フリースクールの位置付けや支援策等について結論を取りまとめるとしています。

フリースクールへの公的支援が今何故大きなテーマとなっているのかというと、下表の通り、不登校の児童生徒の状況は依然として深刻であり、そうした不登校の児童生徒に対して学校外の学びの場を確保する事が、重要な政策課題となっているからに他なりません。

全国の不登校児童生徒数の推移

	小学校		中学校		高等学校		合計
	児童数	在籍比	生徒数	在籍比	生徒数	在籍比	合計
H25	24,175	0.36	95,422	2.69	55,657	1.67	175,274
H24	21,243	0.31	91,446	2.56	57,664	1.72	170,353
H23	22,622	0.33	94,836	2.64	56,361	1.68	173,819
H22	22,463	0.32	97,428	2.73	55,776	1.66	175,667
H21	22,327	0.32	100,105	2.77	51,728	1.56	174,160

文部科学省の資料により作成しました。

これまで学校現場では、不登校の児童生徒に対し担任の教師が家庭訪問する等して登校を促す努力をして来ましたが、小中学校だけでも毎年 10 万人を超える不登校児童生徒がいるというのは、これまでの取り組みだけでは限界があるという事を

示しており、不登校の児童生徒に学びの場を確保するというのは、放置できない問題だと思っています。

一方で、教育の機会均等や教育水準の維持向上等に果たして来た学校教育の意義は、今日においても何ら変わるものではありませんし、現在のフリースクールが学校の持つ教育力に比肩し得る力を持っているとも思えません。

多様な学びを確保するとはいっても、子ども達には、何処に住んでいても一定レベルの教育水準は確保されるべきであり、それは不登校児童生徒に対しても同様だと思います。

下村文部科学大臣は、1月27日の記者会見において、「フリースクール等の自主性・多様性をどう保障しながら学習面・経済面で支援するか」が課題と述べていますが、公的支援を行うという事になれば、フリースクールに対しても支援対象や活動内容について一定の基準を設け、規制する事になりますので、フリースクール側としても、公的支援を受けるという事は諸刃の剣という側面があると思います。

こうした議論になると、私はいつも繰り返し申し上げるのですが、学校は行きたくなければ行かなくても良い存在なのだろうかという事です。私はそうは思っておりません。

私は、子ども達にとって極めて重要な居場所であり、仲間と切磋琢磨しながら共に学び、成長する上でも、学校の持つ重要性は、今後も何ら変わるものではないと思っています。従って、文部科学省には、不登校の原因を根本から調査し、国を挙げて、不登校児童生徒を出さないための施策を強力に進めていただきたいと思っています。

ただ、沢山の不登校児童生徒が存在するという現実を前にして、何らかの対症療法が必要であり、フリースクールのような、学校以外の学びの場の広がりやその必要性が高まっている事も否定できません。

下村文部科学大臣は、先程の記者会見の中で「不登校であってもそれぞれの子どもの能力が生かせるよう、子ども達の視点に立った支援策や多様な子ども達に対応出来るよう、教育の在り方について検討してまいります」と述べていますが、私は、フリースクールに対する公的支援に向けた議論は今後の学校教育の在り方そのものをも変える契機となるものと受け止めていますので、その議論の行方を注目して見て行きたいと思っています。(塾頭：吉田 洋一)